

【審査論文】

『元禄風韵』 「師の桜」 歌仙分析

佐藤 勝明

An analysis of Genrokuhin

Katsuaki SATO

要旨

荷兮編『冬の日』（貞享二年刊か）は貞享元年冬の旅中に芭蕉が名古屋の連衆と巻いた五歌仙を収め、俳諧史上画期的な連句集として知られる。しかし、これが突如として生まれたものかどうかを言うためには、同書以前の作品と比較する必要がある。そこで、本稿ではその作業の一つとして、芭蕉が名古屋に入る前、大垣で塔山・木因・如行と四人で巻いた「師の桜」歌仙（『元禄風韵』所収）を取り上げ、それぞれの付合を、①「見込」、②「趣向」、③「句作」の三段階による分析方法を使って読み解いていく。そして、表現面での難点が多く、付合や一巻の展開にも問題は指摘できるものの、疎句化を意識した付け方が進行的に行きつつあることも認められ、たしかに『冬の日』につながる歌仙であることを明らかにする。

キーワード… 俳諧・芭蕉・連句・貞享期・元禄風韵

210

荷兮編『冬の日』（貞享二年刊か）の重要性は今さら説くまでもなく、貞享元年冬に芭蕉が名古屋で巻いたその五歌仙を通覧すれば、一句の形象も付合のありようも、たしかに貞門・談林とは確実に一線を画していると知られる。では、なぜそれが初対面である名古屋連衆との間で可能になったのか、それ以前の興行にも同様の特徴は見られるのか、天和期の蕉門作品との関連はどのようなかと考えると、なお未解決の問題も少なくないことに気づく。そ

こに切り込む第一歩として、ここでは芭蕉が名古屋に入る前、大垣で塔山・木因・如行と四人で巻いた「師の桜」歌仙を取り上げ、『冬の日』との関連を視野に入れつつ、その傾向を探っていくことにしたい。付合の分析にあたっては、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか「見込」、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか「趣向」、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一

句にまとめたか〔句作〕、という三段階による分析方法を用いる。先行する注釈書には、『校本芭蕉全集 第三卷』（角川書店 昭和38年刊）、阿部正美『芭蕉連句抄 第四篇』（明治書院 昭和51年刊）、島居清『芭蕉連句全註解 第三冊』（桜楓社 昭和55年刊）などがあり、略称をもって適宜に利用した。出典の『元禄風韻』は木因編になる俳諧撰集で、貞享元年から元禄十七年までの連句五巻を収め、写本のまま伝わったことが知られる。勝峯晋風編『新編芭蕉一代集』（春秋社 昭和6年刊）が倉重逸志筆写本『元禄風韻』から本歌仙を収録した後、その筆写本が行方不明となったため、上記の三書や『古典俳文学大系 芭蕉集全』（集英社 昭和45年刊）などは、すべて『新編芭蕉一代集』を出典として本歌仙を掲出する。その後、化月坊筆写本『元禄風韻』が出現し、宮田正信「化月坊本元禄風韻」（『中京国文学』1 昭和57・3）に全文が翻刻されている。化月坊は明治三年没の美濃派俳人で、逸志はその弟子に当たるものの、両本には表現や表記の異同が少なからずある（ただし、宮田稿が「両者は別系統の転写本の如くである」と述べるほどの懸隔とまでは言いがたい）。本稿では、宮田稿の翻刻本文を底本として用いつつ、『古典俳文学大系』の本文により数箇所を直した。句の掲出にあたっては、原典に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名（カナは原典にある通り）を私に付した。

師の桜むかし拾はん落葉おちばかな

塔山

発句 冬十月（落葉）

〔句意〕師にゆかりの桜も落葉の時節、それを拾い往時を手にすることだ。
〔備考〕作者の塔山は、千春編『むさしぶり』（天和二年刊）に発句一が入集するなど、天和期蕉門といち早く結びついた大垣俳人として知られ、芭蕉とはすでに江戸で交流を果たしていたと見られている。「師の桜」は、その

ことを踏まえ、芭蕉を師と呼んだものに相違なく、芭蕉の天和期当時の俳諧を桜になぞらえた措辞と見られる。「落葉」は、その桜の葉も落ちる季節になったことを表し、「むかし拾はん」をその上に冠して、落葉を拾うことでそのことを偲ぶという意を示したのであろう。一見すると、旧風への愛着とも受け取られかねない一句ながら、「むかし」の語を用いたことからは、桜（天和調）を過去のものに見定め、また来る開花（新風）を待望する思いが込められてもいよう、と推察することができる。それにしても、「全体に表現が未熟舌足らずの感を免れない」（『連句抄』）のはたしかで、わかりにくい句と言わざるをえない。芭蕉自筆の初稿本『野ざらし紀行』に発句・脇のみが書き付けられ、下五が「この葉かな」となっている。

薄すすきを霜ひげの髭ひげ四十一

芭蕉

脇 冬十月（霜）

〔句意〕薄に置く霜は白く、自分も白い髭をした四十一歳の老人である。
〔付合〕①前句を桜の落葉が散り敷く光景と見定めつつ、「師」の語が使われていることにも注目し、②初冬の景観を別に探るとともに、初老を過ぎた自らの境遇をこれに重ねようと考え、③霜の降りた薄と同様、四十一歳となった私は髭も霜のようであるとした。

〔備考〕「薄を霜」は初稿本『野ざらし紀行』に「薄に霜」とあり、この方がわかりやすい。薄に霜が降りている光景であり、同時に、これは髭の白さを比喩的に表している。「落葉・木葉」と同様、「霜」も諸書に十月の扱ひ。四十一歳は芭蕉の実年齢であり、四十歳を初老とする当時の習いからして、これも老いの感慨を述べたものに相違なく、合わせて発句の挨拶に対して謙退の意で応じたのだと見られる。

月夜澄_ム竹の曲_ま景_{けい}琵琶_{びわ}澄_すて

木因

第三 秋八月ないし三秋(月夜) 月の句

〔句意〕澄んだ月光の夜、竹の曲景で演奏される琵琶の音も澄み切っている。
 〔付合〕①前句を初老過ぎの清逸な境涯にある人物と見込み、②その人が独り清興にふけるさまを想像しつつ、「霜」から「月光」を連想して月の句にしようと考え、③澄んだ月の下、椅子で奏する琵琶の音も澄んでいるとした。
 〔備考〕「月夜澄_ム」は夜の月光が澄んでいること。「曲景」(逸志本の「曲録」は転写の過程で生じた誤りであろう)は主として僧が法会などに用いる椅子で、寄りかかる部分が湾曲するか、背もたれと肘掛けが曲がった一本の棒でつながっている。「琵琶澄_て」は琵琶を奏する音の澄んでいること。「澄_ム」と「澄_て」の重複は、意図的な措置であったとしても、たしかに「拙劣」(『連句抄』)との印象を与えかねない。敢えて冬から秋へ季移りし、ここに月の句を出したのは、月光を霜に見立てる伝統(『類船集』に「霜↓夏の月・秋の月」に従ったもので、ここにもやや安易な姿勢が窺われる)。

簾_{みす}にカジカの声_{こゑ}を儲_{たくわ}し

如行

初才4 秋八月(カジカ)

〔句意〕鰍_{かじか}の音が聞こえる川辺に席をしつらえ、簾_{すだれ}を垂れ下げた。
 〔付合〕①前句を雅宴における余興と見て、②その座に興趣を添える景物を探りながら場を案じ、③簾を下ろした川辺の席で鰍の声を味わうとした。
 〔備考〕ここでの「簾」は「御簾」に同じくミスと読ませる。「カジカ」(逸志本では「鱒」の表記)はカサゴ目カジカ科の淡水魚で、『毛吹草』『増山井』等に八月の扱い。食用になり、やはり水辺に生息する河鹿蛙との混同から、よい声で鳴くとされていた。「儲_し」は逸志本に「設_し」の表記。この二字は通用し、どちらも設置するの意で用いられる。一句は「鱒の声に簾を設_し」

の倒置法」(『連句抄』)と見て誤らず、これも天和期の俳諧に多用される手法であった。簾を下げた席で独り琵琶を弾ずるとの解も可能ながら、三句の変化という点からも、ここは複数の者がいる場と見ておきたい。

洞_{ほら}鴨_{がも}の石_{いし}の古巢_{ふるね}も冷_{すず}しく

芭蕉

初才5 秋九月(冷_{ひや}しく)

〔句意〕洞に住む鴨の、その石の古巢も冷え冷えとした感じである。
 〔付合〕①前句から溪流のさまを感じ取り、②その場にいなそうな別の生物を探り、③鴨の古巢である石の洞も冷然と感ぜられるとした。
 〔備考〕上五は、底本に「飼鴨の」、逸志本に「洞鴨の」とあり(「飼」と「洞」は草体が類似)、どちらを採るかで悩まされる。「洞鴨」は「石の洞に棲む鴨」(『校本』)をさす造語らしく、前句の場に飼育の鳥はふさわしくないことから、後者に直すこととする。その「洞」をさらに「石の古巢」と言い替えたのは、鰍が石の裏に多くいることからの連想でもあるろう。「すさまじ」は動詞「すさむ」が形容詞化したもので、不調和から起る荒涼とした感じが原義。後に「冷」の字が当てられ、秋(とくに晩秋)の冷え冷えとした感覚を表すようになり、『毛吹草』『増山井』等でも九月に扱われる。

作らぬ松の雨に伸びたる

塔山

初才6 雑

〔句意〕手入れもしない松が雨の中で枝を伸ばしている。
 〔付合〕①前句を庭園の中の池の景色と見換え、②そのすさまじいあり方から荒れたままの庭園を思い描き、③松も自然のままに枝を伸ばし、雨の中に立っていると見た。

〔備考〕「作らぬ松」は格別な手入れをしない自然のままの松。枝も伸び放

207
題のまま雨に濡れているのを、「雨に伸びたる」と表現したわけである。

草鞋わらんぢを印つぎの塚つみに築つしより

如行

初ウ1 雑

〔句意〕草鞋にちなむ記念の塚を築き、中に草鞋を埋め込んだ時から。

〔付合〕①前句の松を相当の年月を経た老松と見なし、②これを何かの記念に植えられたものと考えて、何か伝承をもつ土地であろうと想像し、③それは草鞋を中に埋めたこの塚の築かれた時からなのであるとした。

〔備考〕「印の塚」は、何らかの故事・来歴をもち、そのことを形に示すための塚ということで、「昔ここで誰それが草鞋を脱ぎ…」といった伝承のある塚なのである。「築」は四段動詞「築く」の連用形で、土や石を積み重ねて固め、垣・台・塚などを造ること。ここは、塚の中にその草鞋を埋め込んだはずであるから、「築し」は「築込し」の意味でも用いられていることになる。すなわち、塚を築いたという意と、塚に草鞋を築き込んだの意を、二つながら「築し」の一語が担っているわけである。

嵐の太郎熊狩くまがりに入いる

木因

初ウ2 雑

〔句意〕嵐の太郎が熊を狩りに山に入っていく。

〔付合〕①前句の塚を「この先に入るべからず」といった戒めの印をなすものと見込み、その伝承的な気分に着目し、②伝承的な場に伝承的な人物で応じるべく、禁制でも何でも破ろうかという勇猛な者を想定して、③嵐の太郎と呼ばれる者が熊の狩猟に行くとした。

〔備考〕「嵐の太郎」はいかにも猛者であることを感じさせる替名であり、こうした架空の名称は、天和・貞享期の芭蕉俳諧に多見されるものであった。

「熊狩」は山野の熊を狩り捕えることで、「入」はその山野に分け入ること。

武たけかれと婿むこの心こころやためすらん

塔山

初ウ3 雑

〔句意〕猛々しくあってくれと、婿の心のほどを試すのであろうか。

〔付合〕①前句の人物が危険を伴う熊狩に行く点に着目し、②そこにはやむにやまれぬ事情があり、他からの要請があるのであろうと考え、③妻の父が婿に勇武の気性があることを求め、その試しとして行かせるのだとした。

〔備考〕「武かれ」は形容詞「武し（猛し）」の命令形で、強く勇ましくあれの意。婿にそう望むのだから、当然、それは舅の願いということになる。

破軍はくじんの誓ちかと餅もち北きたに搗つく

芭蕉

初ウ4 雑

〔句意〕破軍星に対して勝利を誓い、北に向かって餅を搗く。

〔付合〕①前句を舅が婿の武士としての力量を期待する場面であると見換え、②二人を含む決戦前夜の陣内のさまを想像し、③破軍星に誓いを立て、その方角に餅を搗くとした。

〔備考〕「破軍」は「破軍星」のことで、北斗七星の第七星。「破軍の誓」とは、星の名から敵軍を破るという意を読み取り、その縁起をかついで出陣前に破軍星への祭祀をし、勝利の誓いをするのであろう。「餅北に搗」は、その星の方角に向かって餅を搗くことで、これも出陣前夜に前途を祝して行なったものと解される。

日ひの諷うたと簇やじりを踊はてる果はての国

木因

初ウ5 雑

〔句意〕 太陽を讃えて歌い、矢尻を振り立てて踊る、そんな最果ての国だ。
 〔付合〕 ①前句から極北の地での戦と感じ取り、②その戦う相手側へと想を翻し、それを中国の北方民族であるとして、出陣前のさまを想像し、③辺境の地では、太陽への賛歌を歌い、矢を手に振りながら踊っているとした。
 〔備考〕 「諷」とは声に出して歌う歌で、「日の諷」とは「太陽を讃えた歌」（『校本』）なのであろう。「簇」は一般的に群がりを表す字ながら、「鏃」にも通じ、これも矢の先端に付ける鉄などの部分をさすと見られる。「果の国」は中央から遠く離れた地で、中国の北方異民族である「北狄蛮族」（同）が自ずと想起されるところ。付合としては、「前句の軍と対峙している蛮軍の陣中」（『連句抄』）と見るのが自然である。

早苗はじめて得し宝草たからぐさ

如行

初ウ6 夏五月（早苗）

〔句意〕 育ち始めた早苗は、これぞわれらが初めて得た宝の草である。

〔付合〕 ①前句を辺境の民が感謝や歓喜のために歌い踊る場面と見換え、②その人々が中央の風習を覚えて喜ぶさまを想定し、③早苗は初めて手にした宝草だとの、その思いを一句とした。

〔備考〕 「宝草」は宝となる草の意であらう。ここは稲のことをさし、その栽培を通じて安定した食生活が送れるようになったことを、辺境の住人の喜びの言として表している。

世の愛を産けん人の御粧おんよそひ

芭蕉

初ウ7 雑 恋（産けん・御粧）

〔句意〕 世人の愛を一身に受ける御子を生んだという、その母は美しい粧いである。

〔付合〕 ①前句を世の宝ともいうべき存在（「早苗」はその比喩となる）の誕生と見換え、②天皇家などに出産があった場合を想定し、その生みの母へと連想を進め、③世に愛される子を産んだ母は着飾って美しいとした。

〔備考〕 「愛」には幼い者を慈しみ大切にする意があり、ここはその対象となる幼児をさす。よって、「世の愛」で「世間の寵愛を受ける御子」（『校本』）を意味することになり、皇室に待望の皇子が誕生したと見ることができ、
 「粧」は服飾などが整って美しいこと。「産屋」や「化粧」などは恋の詞とされ、この句もそれらに準じて、恋に扱ってよいのだと思われる。

恋降雪こゝろのうへの月しらむ

塔山

初ウ8 冬十一月（雪） 月の句 恋（恋）

〔句意〕 その恋は降る雪の上を照らす白い月光のように清らかである。

〔付合〕 ①前句の美しい女性の出産という点に着目し、②その人の恋のありようを想像しつつ、これにふさわしい情景を探り、③相手の愛を得たその恋は降雪の上の月光のようであるとした。

〔備考〕 「しらむ」は動詞の「白む」で、白く明るくなること。ここは、雪の降り積もる上を月光が差し照らして、さえざえとした白さを見せているわけである。「降」は上下に掛かるとおぼしく、「恋降」は聞き慣れない措辞ながら、その身に男の愛を受けているというのであろう。そう推察はできるものの、表現上、やや無理のある語法には違いない。

曙あけぼのの三線杖さんせんじょうにすがりたる

如行

初ウ9 雑 恋（内容）

〔句意〕 曙のころ、三味線を杖としてつかまり立っている。

〔付合〕 ①前句を恋している人の眺める景と見込み、②それを遊廓などで芸

を演じる女性と考え、その人の恋やつれした姿を想像し、③三味線を杖とすがる曙であるとした。

〔備考〕「三線」は三弦の弦楽器である三味線のこと（逸志本は「三味せん」の表記）で、サミセンともシャミセンとも発音する。近世歌謡における最も一般的な伴奏楽器であり、宴席には欠かせないものであったから、「青楼の雪の朝」（『校本』）と見なす理由も十分にある。この句にも恋の情は認められるものの、「三線」が恋の詞というわけではなさそうである。

よせて
寄手を招く水曳の攪

木因

初ウ10 雑

〔句意〕水引による采配を振るって、寄せ来る軍勢を招き寄せる。

〔付合〕①前句を遊廓での一場面と見定めつつ、「杖に…」には戦場の気分も漂うことを見て取り、②戦に関わる用語を使いながら遊興のさまを描いてはどうかと思いつき、③水引の采配で寄手（実は遊女）を招くとした。

〔備考〕「寄手」は攻め寄せて来る軍勢。「水曳」は「水引」と同じであるらしく、進物の包み紙などを結ぶ和紙で作った紐。「攪」はおそらく「塵」の誤りで、諸注に指摘される通り、軍勢を指揮するため将帥が手に持つ采配のことと見られる。それにしても、水引の采配などあるはずがなく、これも天和期俳諧に好んで用いられた架空の創作に相違ない。一見すると戦場の一幕のようでありつつ、その実は「大臣が…遊女を招き立てる」（『校本』）ことらしく、遊女（敵）の異称がある）を軍勢に見立て、遊女に渡す水引の付いた包み金を「水曳の攪」と言いなしたのだと見られる。

華を射て梢を舟に贈けり

芭蕉

初ウ11 春三月（華） 花の句

〔句意〕花を矢で射抜き、その梢を相手の舟に贈った格好であることだ。

〔付合〕①前句を戦場で寄手を招く場面と見換え、②那須与一の記事を思い起こしつつ、花の定座であることから、相手方の船に掲げられた花を射る場面を構想し、③花の梢を射落として、舟の人々に贈ったものとした。

〔備考〕この付合は、「那須与一扇の話をふまえる」（『校本』）と見ない限り、まったく解釈ができない。つまり、作者も前句の「寄手を招く」からただちに『平家物語』の一場面を想起し、その趣向を句作にまで残したということである。さらに、「献上花は水引でくくるが例」（同）であるならば、詞と詞の縁をかなり多用していることになる。

詩を啼鳥柳みどりに

塔山

初ウ12 春一月ないし三春（柳）

〔句意〕柳の緑に鳥が鳴いて、盛んに詩を吟じている。

〔付合〕①前句の舟を遊覧のためのそれと見換え、②「花」から「柳」への連想を元に、川辺の風景を探り、③緑色の柳で鳥が詩を詠んでいるとした。

〔備考〕花と柳は縁が深く（『類船集』に「柳」↓「桜」）、『連句抄』が指摘する通り、蘇東坡の詩句「柳緑花紅真面目」は謡曲等に引かれ、禅語としてもよく知られていたから、ここに柳を出したのは自然。一句は、そこで鳥が鳴くのを「詩を啼鳥」と言いなしたものであり、あるいは、「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」（『古今集』仮名序）の考え方が、そこには伏在しているのかもしれない。柳は『毛吹草』『増山井』等に一月、『至宝抄』『はなひ草』等に兼三春の扱ひ。

不二の晴蜺に雪を斗り見る

木因

名オ1 春二月（蜺）

〔句意〕晴天の富士山に向かい、蜆の殻でその雪の量を計測してみる。

〔付合〕①前句を鳥が詩（禪の偈など）を唱えているものと読み換え、②その不釣り合いなさまから、結局は生禪に終わってしまうであろうと考え、諺「蜆貝で海を測る」を想起して、③それはよく晴れた富士の雪を蜆の貝殻で測るようなものだとした。

〔備考〕「不二」は「富士」に同じく、富士山のこと。「斗」は「計」に通用する字。「蜆に雪を斗り見る」は、『校本』に指摘がある通り、決して成しえないことをいう諺「蜆貝で海を測る」を踏まえたものに相違なく、「海」を「雪」に替え、富士（大）と蜆貝（小）の対比を際立たせている。ここでの「雪」は春に残る富士のそれで、「蜆」は『毛吹草』『増山井』等に二月の扱ひ。

女に法を説く夜千年

如行

名才2 雑

〔句意〕女に仏法を説いて聞かせる夜は、千年あつても足りない。

〔付合〕①前句が不可能なことを言っている点に着目し、②同じような難事を探りつつ、前句の教説めいた口調から説法の間をも想定し、③女に仏の教えは通じがたく、夜ごとに千年の説法をしても成仏・解脱は難しいとした。

〔備考〕「法」は仏が衆生を教え導く教法。仏教の中には、女性は業が深く成仏しがたいと見る側面があり、一句はその常識を踏まえる。

朝貞に髪結ふ人ぞあはれなる

塔山

名才3 秋七月（朝貞）

〔句意〕朝顔が咲く朝、髪を結う人の姿はしっとりとした情感を感じさせる。

〔付合〕①前句で悟りから遠い女性を話題にしたことに着目し、②女が夜ならぬ朝に行なうことを探り、③朝顔が咲く朝に、結髪しながら見せる女の様

相には情味が感じられるとした。

〔備考〕「朝貞（朝顔）」はヒルガオ科の一年草であると同時に、ここでは前句に「女」「夜」とあつたのを受け、そうした女の起きがけの朝の顔という意味も掛けている。朝顔は無常を感じさせる花の代表ながら、女の顔はそれとは別に、昨夜の寝乱れた姿を残して情味が深いというのであろう。

貧のやつれに萩の庭売

芭蕉

名才4 秋七月（萩）

〔句意〕貧乏にやつれ果て、萩の咲く庭ごと家を人手に渡す。

〔付合〕①前句の「あはれ」を他人の同情を誘う様子と見換え、②その人に起こった重大な変化を想像し、③貧苦の末、庭に萩の咲く家を売るとした。

〔備考〕「萩の庭」は萩の咲く庭の意であり、ここはその家自体を売るのに相違ない。「萩」を出したのは、その可憐な感じが前句の人の「あはれ」（ここでは憐憫の意に読み替えられている）に応じるためであろう。

犬捨る名残は露を吼けらし

如行

名才5 秋七月ないし三秋（露）

〔句意〕犬を捨てる名残惜しさにひたっている時、犬は露に対して盛んに吠えていた。

〔付合〕①前句の人が家を売るほど貧窮している点に着目し、②その人がほかに手放すであろうものとして家畜を思い寄せ、③捨てた犬は露に吠えて名残が尽きないとした。

〔備考〕「萩」と「露」は付合語（『類船集』に「萩↓露」「露↓萩」。「けらし」は「けるらし」の略で、近世では「けり」とほぼ同意で用いられた。

馬塊三谷の楊貴妃の秋

木因

名才6 三秋(秋) 恋(楊貴妃)

〔句意〕馬嵬ならぬ山谷の楊貴妃と言うべき吉原の遊女も、秋を迎える。

〔付合〕①前句をやむなく愛犬を捨てる場面と見定め、②犬を愛玩する存在として上級の遊女を想定し、その零落して贅沢ができなくなった姿へと連想を進めつつ、これを波瀾万丈の人生をたどった楊貴妃に重ねてイメージし、③楊貴妃に匹敵する吉原の太夫らであっても、往時の勢いを失えば淋しく秋を過ぎずばかりだとした。

〔備考〕「馬塊」は「馬嵬」が正しく、中国の唐代、安祿山の乱の際に楊貴妃が命を落とした地として知られる。「三谷」は「山谷」に同じく、吉原遊廓のあった地区(現在の東京都台東区千束)で、これもその遊廓をさしている。「楊貴妃」は美女の代名詞であり、「三谷の楊貴妃」とは、その吉原の傾城を言ったものに違いない。『連句抄』は「犬」から「馬」を導いた「聊か古風な付筋」であるとし、仮にそうであるならば、吉原への通り道であった「馬道」の語を介して、「三谷」が導かれた可能性があるかもしれない。

誰が国の記念ぞ鏡すむ月は

芭蕉

名才7 秋八月ないし三秋(月) 月の句 恋(記念：鏡)

〔句意〕鏡のように澄んだあの月は、一体どこの国の人の形見だと言うのか。〔付合〕①前句で馬嵬の楊貴妃が詠まれていることに着目し、②ここで月を出すべきことから、楊貴妃と連想関係にある鏡と月を重ね、その月を見ながら異国の故事を偲ぶ人を想定し、③誰の国の記念として月は鏡のように澄んでいるのか、との感慨を一句にした。

〔備考〕この句がわかりにくいのは、楊貴妃の死からその形見としての鏡を導き出し(『類船集』に「鏡↓貴妃のなやみ」「形見↓鏡」)つつ、それを「鏡

すむ月」(『校本』に「鏡の如く澄む月」とある通りであろう)と言いなし、さらに「誰が国の記念」の臚化表現を使ったからにはかならない。すなわち、〈楊貴妃の形見である鏡〉↓〈楊貴妃の形見である鏡のような月〉↓〈どこか異国の人の形見である鏡のような月〉という作者の思考回路が想定されるのであり、詞の付けと持って回った言い方が目立つ。なお、少し後の『をだまき綱目大成』に「形見のかゞみ」は恋の詞として登載される。

琴の唱歌に作り艶れて

塔山

名才8 雑 恋(艶れ)

〔句意〕琴に合わせる色めいた歌を作っては歌い戯れて。

〔付合〕①前句を異境の地で月を眺める人の発語と見換え、②回国の芸能者が月に対して歌う場面を想像し、③琴歌の詞に恋を歌って楽しむとした。

〔備考〕「唱歌」は楽器の旋律を口で歌うこと、また、楽に合わせて歌うこと。ここでの「作り」は、琴に合わせて歌う歌詞を作るのだと見られる。「艶れ」は「戯れ」に同じく、遊び興じると色恋にふけるの両意があり、ここは恋に關した歌を作って遊ぶわけである。あるいは、『連句抄』のように、前句を歌の文句と見ての付合と見ることできる。

明石なるしらゝ吹上須磨明石

木因

名才9 雑

〔句意〕明石の…、白良・吹上・須磨・明石よ。

〔付合〕①前句の琴歌を作って歌うという点に着目し、②歌うに調子のよい文句を探り、歌謡類を参考に、いかにもありそうな歌詞を案じて、③白良・吹上・須磨・明石などと歌うとした。

〔備考〕「明石」は現在の兵庫県明石市。「しらゝ」は現在の和歌山県西牟婁

那白浜町の海岸。「吹上」は現在の和歌山県和歌山市にある海岸。「須磨」は現在の兵庫県神戸市須磨区。いずれも歌枕として知られる海浜がある。箏曲に「須磨」があり、歌謡の「月見」（『松の葉』所収）に「しらゝふきあげ」などとあることが、『連句抄』に指摘されている。

夕べ侘しう鯛寺にねん

如行

名才10 雑

〔句意〕わびしげな風情の夕暮れ、鯛寺に寝るとしよう。

〔付合〕①前句の地名列挙を諸国行脚の者の述懐などとして見て、②その人が明石に宿りを求める場合を想定しつつ、その地の名物に鯛があることも思い起こし、③夕方のものわびしさを味わいつつ鯛寺に宿泊しようとの、その者の思いを一句とした。

〔備考〕「侘しう」は「侘しく」の音便形で、簡素にして閑寂な情趣があること。逸志本の「侘しらぬ」では意味が通らない。「鯛寺」は架空の名称で、何か鯛にちなむ縁起がある寺なのであろう。「明石」と「鯛」は付合語（『類船集』に「鯛」↓「明石」。「ねん」は「寝ん」で、「ん」は推量・意志の助動詞「む」に通用する。

霰うつ草刈鼓とり出て

嗒山

名才11 冬十一月（霰）

〔句意〕草刈の鼓を取り出して霰が降り打つように打ち立てる。

〔付合〕①前句の「侘しう」を物足りない気分の意に読み換え、②それをかこつ旅人を土地の人が芸能などで慰める場面を想定し、③草刈鼓を霰のように打って聞かせるとした。

〔備考〕この句の「霰うつ」は「霰の如く鼓を打つ」（『校本』）の意である

らしい。「草刈鼓」も架空のもので、「草刈笛による造語」（同）と見られる。「草刈笛」は草を刈る少年の吹く笛で、謡曲「敦盛」にも見えることを重視すれば、「須磨明石」からの連想がこの句にまで及んでいるとも言える。

棺に齒朶を飾る年の夜

芭蕉

名才12 冬十二月（年の夜）

〔句意〕大晦日の夜、死者を収めた棺にまで新年用の齒朶を飾る。

〔付合〕①前句を何か特別の席で演奏する場面と見込み、②辺境の地の葬礼を想起し、特殊な状況下でのその家のさまを探り、③棺にまで齒朶を飾る一年最後の夜であるとした。

〔備考〕「齒朶」はシダ植物の総称で、「齒朶を飾る」はその一種である裏白の葉を新年の飾りとする事。『年の夜』は大晦日の夜。一句は、歳末に死者が出たためその棺にも齒朶を飾るといことながら、迎春と葬儀を無理に合わせたとの印象を拭い切れない。それは、あるいは『校本』の指摘するように、「草刈」に応じて「齒朶」を出したためでもあろうか。

愚を溜て金を我子に隠したる

如行

名ウ1 雑

〔句意〕愚行を積み重ねて、貯めた金をわが子にさえ隠していた。

〔付合〕①前句を葬礼の夜と見定め、②その場を出そうな故人に対する評判の類を想像し、③愚かにも貯め込んだ金をわが子にも隠して教えないとした。

〔備考〕底本には上五「画を溜て」とある（「画」の旧字「畫」と「愚」は草体が類似）ものの、ここに「画」を出す必要性は乏しいため、逸志本の「愚を溜て」に校訂した。これは「愚行を重ねて」（『校本』）の意であるとおぼしく、同時に「溜て」は「金」にも掛かり、一句としては、「愚かにも金を貯める

ことに専念し、しかもその在り処を我が子にも隠して教へなかつた」(『連句抄』)といった意になるのだと見られる。それにしても、棺中の人を守銭奴であつたとする必然性はなく、恣意的な付合と言わざるをえない。

二匹の牛を市に吟ずる

木因

名ウ2 雑

〔句意〕二匹の牛を売りに来て、市中声を上げる。

〔付合〕①前句を金儲けにしか関心がない人と見て、②その人がいかにもやりそうなることを案じ、③飼っていた二匹の牛まで売ってしまおうと、市中売り声を出すとした。

〔備考〕底本には「二足の牛を…」とあるも、これでは意が通じず、「足」を「疋」の誤写と判断し、逸志本の「二疋の牛を…」に校訂した。「疋」は「匹」に同じ。「吟ずる」は声を出して言うことで、ここは「売り声を上げる」(『校本』)ことなのであろう。『連句抄』は「市に虎」の故事(『戦国策』)を踏まえたとし、その可能性も全否定はできない。

鸚兮鸚兮朝の喧キ

芭蕉

名ウ3 雑

〔句意〕朝のやかましさは、まるで鸚鵡のようであるなあ。

〔付合〕①前句が市での売り声を扱ったことに着目し、②市全体の喧噪へと思を広げ、③朝の喧噪は鸚鵡のようであると、漢詩文的な語調で一句とした。〔備考〕「鸚兮鸚兮」は「鸚鵡」を二字に分けて助辞「兮」を加えたもの。「喧キ」は耳に障ってやかましいこと。「鸚鵡」は人の言葉をまねて鳴き立てることから、やかましさを代表として用いたのであり、「鸚」と「鵡」を分けたのも、前に「二疋の牛」とあつたのにあしらつた(『連句抄』)と見てよいのかも

しれない。なお、語調は謡曲「百万」の「わが子に鸚鵡の袖なれや」を受けた可能性があり、これが次句につながることも考えられる。

美山の滝を産水に汲む

嗒山

名ウ4 雑

〔句意〕美山の滝から産湯に使うための水を汲む。

〔付合〕①前句を人声のようなそでないような音声と見て、②産声を発する生まれたての赤子を想定し、産湯を使う場面へと連想を進めつつ、前句の漢詩文的語調にも合わせようと考え、③美山の滝を汲んで産水にするとした。〔備考〕「美山」に関しては、『山海経』に出る中国の山名とする『連句抄』の見解に従う。「産水」は産湯に使う水や産湯自体をいう。付合としては、「前句を嬰兒の初声とした」(『校本』)と見るほかなく、「美山の滝」も「前の漢詩文調に相応しく中国の山名を持出した」(『連句抄』)以外の必然性に欠け、作為的な要素の強い付合と見ざるをえない。

散と折る花に白髪しろがの芳かほしく

木因

名ウ5 春三月(花) 花の句

〔句意〕散るならば散れとの思いで折った花で、白髪が芳しく匂っている。

〔付合〕①前句から仙境の趣を看取し、②そこで産湯を浴びて育った者の行く末を想像し、③散るもかまわず手折った花で白髪も芳香に包まれるとした。〔備考〕「散と折る」は「散ろうとままよと手折る」(『校本』)の意。諸注の指摘する通り、前句から仙境の気分を感じ取つての付けであろう。

世の外そと軽し身は野老ところう売り

如行

挙句 春一月(野老)

〔句意〕野老を売って歩くその身は、世俗を離れていかにも軽々としている。
 〔付合〕①前句が老人の白髪を扱っていることに着目し、②その人を超俗的な存在にとらえつつ、老人の白髪から野老を連想し、③野老売りは世外の境地にあつて身も軽いとした。

〔備考〕「世の外」は「世外」に同じく、俗世間を離れた場所や境涯のこと。「野老」はヤマノイモ科の蔓性の多年草。根莖に髭根の多いことから、これを老人の髭に見立て、長寿の象徴として正月の飾りに用いる。「野老売り」はこれを売り歩く者。これも三句がらみの傾向がある。

すでに『猿蓑』所収歌仙など元禄期の芭蕉連句を知っている目からすると、以上の通り、この一卷にはふつつかに感じられる点が少なくない。それを大別すると、表現の拙さ、やや安易な連想、転じの悪さ、の三つとなる。

表現上の難は、まず、発句「師の桜むかし拾はん落葉かな」のわかりにくさから始まっている。「師の桜」といい「むかし拾はん」といい、これだけでは何を言いたいのかが伝わらず、一句としての形象度は低い。芭蕉句「誰が国の記念ぞ鏡すむ月は」(名オ7)も相当に難解であり、同「洞鴨の石の古巢も冷じく」(初オ5)など、わざとらしさの感じられる句は少なくない。「宝草」(初ウ6)・「水曳の櫛」(初ウ10)・「草刈鼓」(名オ11)などの造語的表現や、「嵐の太郎」(初ウ2)・「鯛寺」(名オ10)のような架空の名称も目に立ち、「恋降雪」(初ウ8)・「三谷の楊貴妃」(名オ6)・「栢に歯朶を飾る」(名オ12)など、作り事めいた措辞も枚挙にいとまがない。そして、そうした措辞・表現の不備は付合のありようとも無関係でなく、「曙の三線杖にすがりたる／寄手を招く水曳の櫛／華を射て梢を舟に贈けり」(初ウ9～11)の場合、初ウ10の木因句は、〈三線↓遊興〉へ杖にすがる↓戦場〉という二つの連想を合わせ、遊興を戦闘になぞらえて表そうとしたのだし、初ウ11の芭蕉句

は、へ寄手を招く↓那須与一の話×水曳↓贈答〉という二つの連想を合わせ、趣向に頼った句作に終始するものであった。一句の形象がしつかりせず、けやけき語を用いた句に対しては、十分な見込をすることができないため、どうしても詞の連想に頼りがちとなるわけである。もう一例、「犬捨る名残は露を吼けらし／馬塊三谷の楊貴妃の秋／誰が国の記念ぞ鏡すむ月は」(名オ5～7)を取り上げると、名オ6の木因句は、〈犬の愛玩↓遊女↓吉原〉へ犬↓馬↓馬塊↓楊貴妃〉へ馬↓馬道↓吉原〉といった連想がまぜこぜになったものとおぼしく、名オ7の芭蕉句は、〈楊貴妃↓異国〉へ楊貴妃↓鏡↓月〉の連想から一句をなしたものである。ここにも、先の例とほぼ同じ様相を見て取ることができるし、このほかにも、詞の連想に基づく付合は容易に指摘することができる。また、三句がらみや同調子の句が続く箇所も多く、たとえば、「朝貞に髪結ふ人ぞあはれなる／貧のやつれに萩の庭売ル／犬捨る名残は露を吼けらし」(名オ3～5)など、打越の「あはれ」を前句が「貧のやつれ」と受けたところまではよいとしても、付句に「犬捨る」と詠んでしまつては、三句が類似するとの非難からは逃れられまい。「明石なるしら、吹上須磨明石／夕べ侘しう鯛寺にねん／霰うつ草刈鼓とり出て」(名オ9～11)の場合も、鯛寺に寝ようとする行脚の人をささみ、その前には歌(名オ8には明確に「唱歌」とある)、後には鼓の演奏が配される形であり、観音開きと言わざるをえない。しかも、「草刈鼓」が謡曲「敦盛」で知られる「草刈笛」のもじりなのであるから、打越の「須磨明石」は、前句の「鯛寺」ばかりでなく、この句にまで影響を及ぼしていることになる。最後の「美山の滝を産水に汲む／散と折る花に白髪の芳しく／世の外軽し身は野老売り」(名ウ4～挙句)も三句がらみと見るべきもので、打越の「美山の滝」に仙境めいた気分を感じ、それにふさわしい人を出した前句に対して、その気分から離れることはなく、「世の外」とむしろそれをだめ押しするような付句をな

している。「前句は是これいかなる場、いかなる人と、其業そのわざ・其位そのゐを能見よ定め、前句をはなしてつくべし」(『去来抄』)というのが元禄期に完成をみる芭蕉流の付け方であるならば、当該歌仙の場合、前句を打ち放す意志に欠け、前句ばかりか打越からも影響を受けがちと言える。そして、それは表現面での未熟さとも相まって、なお過渡期的な作品であるとの評価を妥当なものにする。ことに、芭蕉の付句にも難解で不備な要素は多く見られるのであり、このことを無視するわけにはいかない。

では、『ひさびさ』『猿蓑』から『すみだはら』『続猿蓑』へと続く、元禄期芭蕉俳諧の成果はいったん頭から追いやつて、改めてこの歌仙を読み直せばどうなるであろうか。芭蕉自身の「鸚兮鸚兮朝の喧キ」(名ウ3)に顕著なように、天和期に多見された漢詩文調の名残が散見され、用語の使い方などからも、これが『俳諧次韻』や『みなしぐり』などとつながる作品であることは認められる。先に指摘した仙境趣味・隠遁趣味のほか、「草鞋を印の塚に築しより／嵐の太郎熊狩に入」(初ウ1・2)といった伝承的世界の誇張された人物像を作り上げるところもそうであるし、「破軍の誓と餅北に搗／日の諷と簇を踊る果の国」(初ウ4・5)といった異国趣味に基づく空想的な場面を好んで取り上げるところもそうである。また、「霰うつ草刈鼓とり出て／棺に齒朶を飾る年の夜」(名オ11・12)の正月を前にした葬礼という着想がその典型であるように、ともすれば特殊な状況を作り出してしまいがちな点にも、やはり天和期作品との類似性が指摘できる。そして、何よりも強調しなければならぬのは、これらが『冬の日』の五歌仙にもほぼ共通して見られるという一事である。天和期と貞享期はたしかに連続しているものであり、付合の面でも、早く延宝九年の段階で、芭蕉が「一句、前句に全体はまる事、古風：」(五月十五日付麁時宛書簡)と喝破していたことを忘れるわけにはいかない。すなわち、疎句化への志向はその当時から芭蕉の中にあり、貞享

期の実践もその延長上に位置づけるべきだということである。当該歌仙の場合、前述の通り、やや安易な発想で付けられたものや、前句を引きずっているものも少なくない。それでも、たとえば「薄を霜の髭四十一／月夜澄々竹の曲泉琵琶澄て」(脇・第三)の場合、前句から俗気を払った初老の人物を見て取り、その清僧らしき人がいかにも行ないそうなことを探つて、月光下での琵琶の演奏に到り着いたのであって、「澄々」と「澄て」の重複など、表現面での瑕瑾は指摘できるとしても、付けのありようは芭蕉の主張(「前句に全体：」)にかなうものと言つてよい。もう一例、「朝貞に髪結ふ人ぞあはれなる／貧のやつれに萩の庭売ル」(名オ3・4)を見ても、前句の人物ならばこうでもあろうという事柄を探り当て、それを具体的な行為として描いており、詞の選び方からも、前句と「位」を合わせようとする意識を看取することができる。表現上の難が足を引つ張り、付合や一卷の展開に見劣りが生じているのも事実ながら、天和期の作品から進歩しているのもたしかであり、この先に『冬の日』が誕生するのも当然のことと思われる。

大垣の人々と芭蕉の交流が延宝末にまで遡ることからして、芭蕉が麁時に与えたと同内容の教えは、木因らにも授けられていたと見て問題なからうし、それはまた、木因から熱田・桑名・名古屋などの人々にも伝えられていたであろう。そう見ることによって、名古屋で『冬の日』が成就したことも、大垣での当該歌仙と『冬の日』の間に共通点が多いことも、よく納得されるわけである。この「師の桜」歌仙は、少なくとも残された作品としては、「野ざらし」の旅において最初に興行された一卷であり、『冬の日』につながる作品としても、相応の評価を下してよいものと判断する。

佐藤 勝明 (和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授)

(平成三十年十月十二日受理)